

英語について思うこと

梶 茂 樹*

要 旨

今日、英語の重要性が叫ばれており、また小学校3年から英語を学ぶようになってきているが、なかなか十分な効果が得られない。とりわけ、日本の大学生は英語の語彙力が弱い。小学生でも知っている内容を英語で何と言うか知らない大学生も少なくない。こういう状況に鑑み、英語の語彙力アップのため、2つのことを提案したい。1つは、中学高校の先生が自分の教科を教える時、重要な概念は英語で何と言うかを教えるのである。英語の問題を英語の先生だけの責任にするのは間違っている。もう1つは、英語の特性に係ることであるが、ギリシャ語、ラテン語起源のあまりにもややこしい単語は整理すべきである。英語を学ぶ非母語話者は英語史や英文学に興味があるわけではない。むしろ無色透明な英語を求めている。そのためには世界の言語学者の英知を集める必要がある。

キーワード：英語、語彙力、中学高校の先生の役割、ギリシャ語・ラテン語起源の単語、用語整理

1. はじめに

英語の重要性が増してきている。少なくとも世間ではそうだ。私は小学校では英語は習わず、中学に入って初めて習った。小学校の時習ったのは、日本語のローマ字書きである。そういう時代だった。しかし今は小学校3年から英語学習が始まる。

これに反対する人がいる。例えば、小学校の時は日本語の学習が先で、英語を導入すると日本語の習得に支障をきたすと言う。私はそういうこともあるかなとは思いますが、この意見には賛成しない。まず、小学生に英語を教えたなら日本語にどういう悪影響が出るのか知らない。そういう研究があるのだろうか。私はベルギーに何人か友達がいるが、中にはオランダ語とフランス語の完璧な2言語話者がいる。小さい時からオランダ語とフランス語を使っているのだ。そういう人の場合、オランダ語能力が0.5でフランス語が0.5、合わせて1かということそうではない。オランダ語もフランス語も完璧なのである。実際、どちらの言語でも学術論文を書いている。

もし、小学校3年から英語を習うと日本語の習得に支障が出るというのなら、それを検証する必要がある。英語を小学校3年から習うグループ、4年から習うグループ、5年から習うグループ、6年から習うグループ、そして中学校に入って初めて習うグループとに分けて、それぞれの日本語力を

* 京都産業大学総合学術研究所ことばの科学研究センター

(そして英語力も) 高校 3 年の時点で測ってみるのだ。ただこの実験はやりにくい。小学校 3 年から英語を習うことになっているのに、一部の生徒に習わせないことになるからだ。

また、日本で英語を習っても使う場所がないので意味がないし、上達もしないと言う人もいる。しかし私は、違ったものに慣れるだけでも意味があると思う。私は田舎町で育ったが、幼稚園の時、町の護国神社横の森の中で父親に連れられたアメリカ人の子供に出くわしたことがある。私は一目散に逃げた。その金髪の子供が悪魔のように見え、食べられるのではないかと思ったからだ。こういった無駄な恐怖心を拭い去るだけでも外国人から英語を習うのは意味があるだろう。テレビで見ていると、幼稚園児がアメリカ人から英語を習い、物おじせずに対応しているのを見ると尊敬の念さえ沸いてくる。

本稿は、私の経験を通して、なぜ日本人は英語ができないのか、そして、どうすればいいのか一案を提案したい。もちろん、言っていることの範囲はごく狭いので、これですべて解決とはいかない。しかし検討する価値はあると思う。

2. 二等辺三角形

私が京都大学に勤めていた時、授業の英語化が大きな問題となった。授業の英語化自体は以前から問題となっていたのだが、新入生の教養の授業を英語で行うということで問題が大きくなった。そして、英語で授業をする外国人を大量に雇うという。これには教員の定員の問題、とりわけ教養部を解体した時、定員をどこの部局に割り振ったかという問題とも絡んでいるのだが、そのことには触れない。新入生に英語で授業をするということだけに焦点を絞る。

この案には多くの教員が反対をした。私も賛成できなかった。特に数学の教員からの反対が目についた。私も、新入生が新しいことを英語で直接理解できるかなと思った。

しかし私は、知っていることも英語で理解できるかなという危惧の方が強かった。例えば、二等辺三角形である。二等辺三角形は小学生でも知っている。しかし、これを英語で何と言うか知っている大学生は多くない。英語では *isosceles triangle* [aisúsəliz tráɪæŋgl] である。二等辺三角形を何と言うか知らなくて、英語で高等数学が理解できるはずがない。

日本の大学生は圧倒的に英語の語彙力が不足している。語彙力を高めることが英語力を高める 1 つの道である。では、どうすればいいのか。

3. 二酸化炭素

36 年前、私はコンゴ東部で言語調査をしていた。テンボ語の調査であったが、近くにあった国立の研究所をベースにしていた。しばらく村で調査をしては、100 キロ離れたその研究所に戻って体を休め、そして同時にデータの解析をするのである。

ある日の夜、研究所の所長に用事があり、夕食後所長の自宅に行った。用事はすぐ済み、サロンでテレビを見ながら雑談をしていると、カメルーン西部のニオス湖で火山性のガスが発生し 1000 人以

上もの人が亡くなったという痛ましい事故を報じていた。ニュースはフランス語であったが、私はフランス語には慣れているので、理解にはほとんど困らない。ただ 1 つだけ *carbone* [karbɔ̃] という単語がしばしば出てくるのだが、それが何だかわからない。そこで所長にフランクに *carbone* って何ですかと尋ねた。地球物理学者の所長は、いろいろ説明してくれたが、わかったことは *carbone* は炭素だということであった（英語では *carbon*）。所長は不思議に思ったに違いない。普通に話しているのでバカではないようだが、*carbone* を知らない…。私としても恥ずかしいことであった。30 半ばの大学教員が炭素を何と言うか知らないなんて。

今の時代は COP (Conference of the Parties) や SDGs (Sustainable Development Goals) の世の中である。二酸化炭素が言えなければ話にならない。二酸化炭素は英語で *carbon dioxide* [ká:rbɔ̃ daiúksaid] である。理科の時間にわれわれは元素表を習う。炭素の元素記号は C である。その時、先生が、「C は *carbon* のことである」と言えばいい（元はラテン語の *carbō* 「炭、木炭」である）。「炭素は英語で *carbon* と言う」と教えるのである。*dioxide* が何かわからなくても *carbon* が炭素であるということを知っているだけで話についていくことができる。*carbon* が炭素のことだと分からなければ話にならない。

私は中学や高校の先生が重要な、あるいは基本的な概念を英語ではどう言うか教えればよいと思う。これを英語の先生に頼ることはできない。英語の先生はそれが表す内容を十分理解しているとは限らない。数学や理科の例を出したが、これは美術や音楽、社会なども同様である。

4. 食道

25 年前、私はタンザニアの田舎でハヤ語の調査をしていた。ビクトリア湖西岸のブコバという町から 10 キロばかり行ったところの村に住み込んでいた。近くに村の中学校があり、ある日、用事で中学校に行った。ついでに中学校の授業を参観させてもらった。見学したのは中学校 1 年生の理科の授業であった。タンザニアは小学校は授業はスワヒリ語で行うが、中学校になると英語になる。先生が英語で授業を行うのである。私が見学した授業も英語で行われていた。

生徒たちが勉強していたのは人体の構造と機能であった。黒板に人体の解剖図が掛けられ、先生が、これは肺で、これが気管支、それは食道で、これは胃という風に 1 つづつ示しながら、その働きを説明していた。問題はその用語である。肺や胃は問題ない。*lung*, *stomach* という日常の単語である。しかし気管支、食道はややこしい。気管支は *bronchus* [bráŋkəs] で、食道は *esophagus* [isúfəgəs] と言う。いずれもギリシャ語起源のお化けのような単語である。私はそれを見ていて、一種の不条理を感じずにはいられなかった。タンザニアの中学生は *esophagus* という単語を知らなければ食道のことが学べないのか。

日本と違うのである。日本の生徒は食道という単語を知っていて、それを英語で何と言うかを考える。しかしタンザニアの生徒には“食道”はないのである。もちろん彼らの言語にも食道を指す用語はあるのだが、それは勉強とは一切関係ない世界のことである。彼らは食道のことを *esophagus* とい

う単語を通してのみ学ぶのである。

我々が英語を習う時、なかなか習得できないのは、習う側にも教える側にも問題があるとは言え、英語にも問題があるように思う。なぜ食道のことを esophagus と言わなければならないのか。素直に food tube とか food passage と言えばいいではないか。イギリス人に食道のことを food tube と言えと言うのもどうかと思うが、英語が母語でない人間は food tube で十分である。あるいは、「われわれ日本人は、これからは英語で食道と言う時 food tube と言います。」と宣言したらどうか。賛同する人は世界に多いと思う。

5. アジ

京都大学に勤めていた時、時々大学院生を連れて小旅行をした。ある時、伊勢を訪れ、鳥羽水族館に行った時である。鳥羽水族館の大きな水槽の中を多数のアジが泳いでいた。私の横にいたザンビア人留学生がそれを見て、これは mackerel 「サバ」かと私に聞いた。いや、これは日本語でアジというものでサバではない、と答えたのだが、その留学生は説明パネルを見て、やっぱり mackerel だと言うのである。そのパネルには英語名で Jack mackerel と書いてあった。私は、英語の fish terminology は poor だから、そんなの信じてはいけなかったのだが、ザンビア人はそうは思わないようであった。英語で書いてあることが正しいと信じて疑わないのである。

6. 個体識別

1つの言語は1つの世界を形成しており、そこには歴史に裏打ちされた物の見方がある。それはそれで立派なもので、外部の者がとやかく言う筋合いはない。当事者が、それで満足していればそれでいいのだ。しかし母語話者でない場合は、そんな見方にこだわる必要はないのではないか。

思い出すのは河合雅雄先生である。河合先生は霊長類学者で私とは専門は違うのだが、同じ京都大学でアフリカを調査していたということもあって、講演を聞いたり、また個人的に話をする機会があった。

ある時、先生は私と話をしている時、こんなことを言われた。動物生態学の話であったが、イギリス人は動物の個体識別力が弱いと言うのである。動物を個体ではなく、群れとして捉えたがるというのである。日本のサル学が発展したのはサルの個体識別があつてのことである。イギリス人には、そういった発想が出てこない。

そう言えば、例えば魚である。魚は英語では fish であるが、これは単数でも複数でも fish で、複数だからと言って fishes とはならない。魚は群れで泳ぐことが多く、群れ全体を1つとして捉えるのである。なので、群れを表す用語は多い。魚は school である。A school of fish 「魚の群れ」という。牛なら herd だし蜜蜂なら swarm である。英語の辞書を見れば、群れを表す用語はあふれている。狼 pack, 穴熊 cete, ライオン pride, シギ wisp, などなど。

Sheep 「羊」も単複同形である。羊は群れをつくる。小高い丘の上から見るとよく分かるが、羊は

何十頭といっても、群れ全体がまるで1つの生き物であるかのように動く。しかし、これは1つの見方であって、そう見ないといけないというわけではない。実際、羊は個体単位で存在しているわけだ。英語とよく似たフランス語では単数と複数を区別し、un mouton「一匹の羊」、des moutons「何頭かの羊」などと言う。

ここで言いたいことは、われわれが物を見る時、日本語の世界に固執してはいけないのと同様に、イギリス人やアフリカ人は、そしてわれわれも、英語の物の見方に固執してはいけないということだ。

7. 言語学

英語は少し割り引いて考えないといけない部分がある。思い出すのは鈴木孝夫先生である。英語で書かれた言語学の入門書を見ると、冒頭によく Linguistics is the scientific study of language. 「言語学は言語の科学的研究である。」と書いてある。なぜこんな分かりきったバカげたことが書いてあるのかと言うと、鈴木先生によれば、普通のイギリス人は linguistics という単語の意味が分からないからである。言語は language であるから、linguistics もそれと関係があるとすぐ分かればいいが、そうはなかなか行かないらしい。日本語とは大きく異なるのである。

日本語では言語学と言えば言語の学問だとすぐ分かるし、魚類学と言えば魚類を研究する学問だと誰でも分かる。しかし英語で ichthyology [ikθi'ɔ:lədʒi] と言われた時、何人の人が、これは魚類学と言っていると分かるのだろうか。英語は本来の学問用語が乏しく、ギリシャ語やラテン語から用語を多く取り入れている。そういった用語はイギリス人自身が、すでにチンプンカンプンなのだ。われわれが、英語を勉強する時、そういった伝統を踏襲するのか。これはいっぺん考えないといけない問題である。

8. 北京、上海

英語で話をする時、なかなか人の話についていけない原因の1つに、漢語の問題がある。犬養道子さんが書いていたが、英語などヨーロッパ諸語では、中国の地名や人名は現代の漢語の発音（いわゆるピンイン）を用いる。これは日本人も一部はやっていることである。例えば、北京はホッキョウとは言わずにペキンと言う。また上海もジョウカイとは言わずにシャンハイと言う。このペキン（正しくは Běijīng [pěi'ciŋ]）やシャンハイ（Shànghǎi [shàn'hǎi]）という言い方が現代の漢語的発音である。英語ではこれが普通であるが、日本人は北京や上海、南京など幾つかの例外を別にすれば、いわゆる音読み（古代の呉音や漢音など）になってしまう。武漢は新型コロナ・ウイルスのせいで、現代語ではウーハン Wūhàn [wūhàn] だと分かった人は多いと思うが、Chóngqìng [ʃ'ɔŋ'te'hiŋ] 「重慶」や Guǎngzhōu [kuǎŋ[ʃōu] 「広州」となると、もうお手上げである。これも地理の時間に、幾つかでいいので教えたらどうか。その際、東京はトンキン Dōngjīng [tōŋ'te'ŋ] で、大阪はターパン Dàbǎn [tàpǎn] だと言えば、大いに盛り上がるに違いない。

9. 終わりに

日本人は英語ができないと言われる。しかし英語には様々な英語がある。まず思い浮かぶのは方言である。その中でもインド人の英語は特別かもしれない。t, d の音を反り舌音で発音するあの英語には一種の気品さえ感じる。実際、彼らの話し方は堂々としている。しかし英語の方言は何も発音に限ったことではない。単語や言い回しの違う方言は幾つもある。

われわれの英語に対する係わりは様々である。英文学や英語の歴史に興味がある人は、徹底的に英語風の物の見方を身につける必要がある。しかし、そうでない人は、英語を単にコミュニケーションの道具として使うだけなので、むしろ無色透明な英語を望んでいる。そういう人は、気管支を bronchus, 食道を esophagus などという必要はないのだ。

本稿は英語の問題全体を述べたものではない。述べたのは、外国人に対する慣れの問題を別にすれば、語彙の問題である。その中でも特に、語彙力を増すことが、英語力を増す 1 つの方法であると述べた。では、どうすればいいかと言えば、まず知っていることを英語でどう表現するかということから始めた方がいいということだ。知っていることなら自信を持って話すことができる。知っていることなのに、英単語を知らないばかりに話が出来ないというのは情けない。これは、中学校や高校の先生が、授業を少し工夫すれば出来ることが多い。英語の先生だけでは無理である。英語の問題を英語の先生だけの責任にするのは間違っている。中学高校、とりわけ高校の様々な教科の先生が、自分の教科の主要な概念について英語ではこう言うかと教えるのだ。地理の先生には中国の地名、人名についても、現代の漢語発音も教えることをお願いしたい。漢語発音は漢語（中国語）を知らなくても和英辞典を見れば書いてある。和英辞典には声調表記はないが、これは英語としての地名、人名なのだから当然である。無視していい。もちろん、漢語を勉強して教えることができれば尚いい。

英語の語彙力を増すには、それと同時に、英語の用語体系を整理することも必要である。多くの人にとって不要な煩雑さは無用である。恐らく、イギリス人やアメリカ人からもこういった要求はあるのであろう。ここは日本、そして世界の言語学者が知恵を合わせて、やる必要があるのではないだろうか。

Thoughts on English from a Japanese Standpoint

Shigeki KAJI

Abstract

Although in Japan the importance of knowing English is generally claimed and accepted, so that English is taught even in elementary schools today, the desired advantageous effects are not achieved. Typically, there are university students who do not know the English words for elementary concepts that even elementary schoolchildren know. To ameliorate Japanese university students' poor English vocabulary, this article proposes two countermeasures. First, when high school teachers of various subjects teach important concepts in Japanese, they should also teach the corresponding English terms. Holding only teachers of English responsible for all problems surrounding English learning would be misguided. The second countermeasure involves cataloging English terms that seem unnecessarily complicated, especially those of Greek and Latin origin. Most non-native English learners are not interested in the English language itself or its literature. Rather, they need water-clear, practical English. For this purpose, the world's linguists should consult on the best methods for teaching and learning the practical English needed.

Keywords : English, vocabulary, high school teachers' role, words of Greek and Latin origin, arrangement of terms

